

尾本恵市 (2023)

『蝶と人と 美しかったアフガニスタン』

朝日選書

書評

著者は1933年5月生まれであり、現在90歳である。本書は、60年前、著者が30歳のときにドイツに留学中、やはり蝶のコレクターである英国人の知り合いと二人で、アフガニスタンに6月18日から、月日がはっきり書かれていないが、おそらく8月末ごろにドイツにもどったのだろう。2ヶ月あまりの旅行だったことになる。

この旅行のあいだに、著者は多数の蝶を採集した。本書には、これらの蝶の写真が多数掲載されている。数えたら58個の蝶の写真があった。なお、蝶の専門家は、蝶を1頭、2頭と数えるようである。通常日本語だと、蝶には「頭」ではなく「匹」を使うところだが。

本書には、蝶のほかにも、アフガニスタンの美しい自然や人々を撮った写真が多数掲載されている。著者もときどき登場し、30歳の時の若々しい尾本先生に出会えて、不思議な気分になったものだ。なお、著者はわたしの大学院時代の指導教官だった。本書40頁には、ふたりで1997年に刊行した論文に登場した人類集団の系統樹が掲載されている。

これは、本書が蝶の話だけでなく、人類学を研究していた著者なので、人間も多数登場するからだろう。本書には、日本人である著者のほかに、アフガニスタンの旅行に同行した英国人のワイアット、アフガニスタン人のシャーナワズとハビブ・ラーマン、アンジュマン村の村長ワキルハーン、猟師フズラオ、ドイツ・ケーニヒ博物館のナウマン館長の写真が掲載されている。これらのほかにも、名前は書いていないが、多数のアフガニスタン人が写真に登場する。

それにしても、日記や写真が残っているだけでは、本書は書くことができない。著者自身の記憶が、おそらくとても明確なのだろう。60年を経て本書が刊行されたことは、驚嘆すべきことである。

本書は6章で構成されている。第1章「蝶から人へ」は、ちょっとした著者の自伝である。第2章「ことのはじめ」は、本書の中心であるアフガニスタン調査がどのように実現したかについて、さまざまな蝶が登場しながら話

が展開する。第3章「首都カブール到着」で、いよいよ調査がはじまる。なお、日本ではアフガニスタンの首都を一般に「カブール」と表記することが多いが、発音に忠実なのは「カーブル」だそうだ。第4章「幻の蝶を求めてヒンドークシ（山脈）へ」は、アウトクラトールと呼ばれる幻の蝶を、ついに著者が採集するまでの話がつづられている。本書でもっとも長い章だ。第5章「アウトクラトール探査行を終えて」の中心は、蝶ではなく、首都の博物館、バーミアーン、およびハザーラ人をはじめとするアフガニスタンに居住する人々である。最後の第6章「パルナシウスをめぐる出来事」は、パルナシウスと呼ばれるウスバアゲハ蝶をめぐる話であり、アフガニスタンとは直接の関係はない。末尾の「二足のわらじ」と題されたあとがきには、中立進化論を提唱した木村資生博士がランの栽培をされたことや、木村博士の師匠だったヴィオラ演奏の名手、クロウ博士が登場し、蝶採集と人類学の双方をたしなんだ著者と同様に、かれらも異なる2分野で活躍したことが語られている。

本書は、アフガニスタン、蝶、人類学という3種類の楽しみ方があるので、読者はどれかの部分に興味があれば、本書を楽しむことができるだろう。